

ビッグイベント前夜

深夜、大手町界隈のビルは明かりが灯ったまま、その前にはタクシーが長い列を作っていた。こんな光景を共有するのはきっと年齢を重ねたディーラー達に違いない。ビッグイベントの際はもちろんのこと米国の経済指標の発表の日にはこれが常態であった。

今週のFOMCがビッグイベントであることには違いないが、利上げの可能性については依然として不明瞭だ。金利先物市場での価格からは利上げが30%ほどの可能性だが、昨日の市場では政策金利との連動性が高いとされる2年物米国債が大きく売られた（イールド上昇）。10年債も売られた。その点では市場での利上げ予想は少し高まったとも言える。ブルンバーグの調査ではエコノミストたちの見方は五分五分だ。

米国の利上げにより最も影響を受けるとされる新興国の中央銀行も、以前はインドやブラジルをはじめほとんどの中央銀行は利上げの見送りを主張していたが、最近ではインドネシアやペルーの中銀など早期の利上げ支持に変わったところも増えてきた。利上げによる資本流出の懸念が少なくなったわけではないが、どっちつかずの状況が続くことによる混乱の方がリスクが大きいとの見方からだ。

国際機関もIMF、世界銀行は利上げ見送りを主張しているが、BISは違う。日銀の総裁も利上げによる「正常化」を支持している。

金融政策を決定するFOMCのメンバーも少し前までは利上げ派と見送り派がメディアに露出していたが、このところ音沙汰がない。何より議長のエーレンからは議会証言以降、全く発言が聞こえなくなった。判断が難しいことは容易に想像できる。

市場への影響と言う点では利上げの有無と同様に声明文が重要だ。利上げした場合どの程度のピッチで利上げが繰り返されるのか、しない場合はいつになるのか、12月か来年以降なのか。そのあたりの感触をつかみたいからだ。

さすがに今週の木曜日は久しぶりに大手町界隈のビルの明かりは深夜まで灯っているだろう。それとも利上げ論議に辟易したディーラーたちはいつものように八重洲辺りのバーで杯を重ねているのだろうか。